

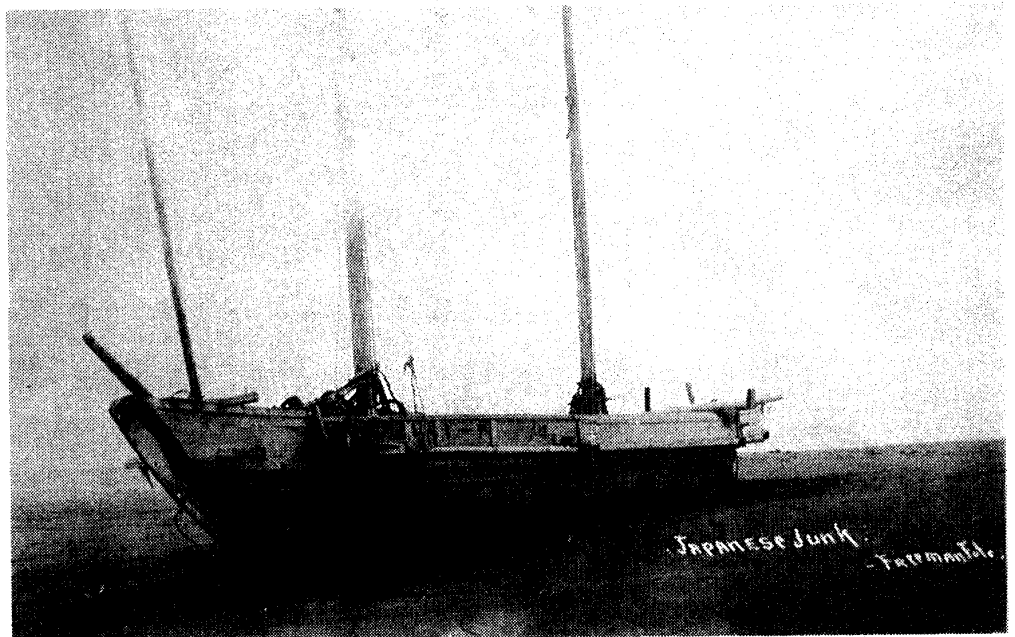
アレナ岬踏査：『打瀬船物語』拾遺

村川庸子

はじめに

大正時代初頭、愛媛県八幡浜市から打瀬船^{うたせぶね}と呼ばれる漁船を仕立てて、アメリカ合衆国への密入国を図った人々がいる。¹⁾当時の日米の移民制限政策のために正規のルートで労働目的の旅券を得ることができなかつたためである。生命の危機もおかす特殊な形の「移民」だけに、背景にはよほど強い移民送出の要因があるはずだと考え、数年がかりの現地調査を踏まえて、十年前に『アメリカの風が吹いた村：打瀬船物語』（愛媛県文化振興財団、1987年）という小著を公刊した。外務省外交史料館所蔵の『本邦人海外へ密航関係雑件』綴の中にあつた、アメリカの移民局における取り調べ調書や、日本の外務大臣宛てのサンフランシスコの帝国総領事館からの報告書などを資料として用いた。動力をもたない近海漁業用の平底船で、太平洋をわたる

という行為の大胆さ、想像される航海の厳しさなど、航海自体にも興味はあつたが、これはいささか「文学的」なテーマであるように思われた。資料の量も限定されており、調査開始の時点で生存していた乗組員は既に一人だけとなつており、あくまでも自分の持ち場の「移民」研究から接近を試みることにした。即ち、アメリカへの密入国を図った人々やその家族に対する面接調査、彼らを生み出す社会・経済的背景となつたと思われる要因について統計的調査などを行ったのである。渡航地アメリカでの生活の



写真A 打瀬船

魚崎組の東光丸。写真のオリジナルはクラーク博物館所蔵。写真は渡辺誠氏（テレビ愛媛）の接写による。

状況については、かなり依拠できる研究の蓄積もあり、これを面接調査で補った。航海中と上陸直後の期間が、空白のままで残された。

この打瀬船の一隻が船出した八幡浜市真網代から「北針研究会」設立の話が届いたのは、平成5年の初めの頃であったと記憶している。「北針」というのは当時用いられていた羅針盤のことで、筆者と同じ頃、同じテーマで取材を始めた作家の大野芳氏のノンフィクション小説『北針』（潮出版社、昭和57年）にちなんで名づけられたものである。研究会の設立の趣意書には、この打瀬船の航海を「豊かなアメリカ大陸に夢とロマンを胸にひめ、この浦人の若者が死と背中合わせの危険と対決し」たものであり、「私たちの体中にはこの熱い血を受け継いでいることを誇りたい」、「子供達に誇りを持って託せる「ふるさと」にするために」とうたわれている。²⁾ 同年8月には発会式が行われ、大野氏の講演が行われた。翌平成6年には筆者が講演のために招かれた。筆者が訪れた時には、既に「冒険とロマンの浜源蔵前」と刻まれた御影石の標柱が建てられており、資料の収集に加えて「北針」の名前入りのTシャツや酒も販売されているなど、その行動力には舌を巻いた。「来年はアメリカに行きますけえ。あちらにも記念碑を建てたいんですらい。」という言葉も、そのまま実行された。平成7年5月、北針研究会のメンバー6名が、船の上陸地点と伝えられるカリフォルニア州ポイント・アレナに向かったのである。研究会の方々の厚意で、筆者もこの旅に同行させていただいたが、この行動力は80年前の「密航者」の姿を彷彿とさせるものであった。テレビ愛媛の取材協力ということもあって、

同年8月の旅行にも同行した。³⁾ 筆者にとってはかつての「空白」を埋める旅であった。彼らは海の向こうで、どのようなセンセーションを巻き起こし、どのような足跡を残しているのか。帰国後の彼らの証言はどの程度実情を伝えているのだろうか。

短期間の調査であり、参加者それぞれに目的も異なるところから、必ずしも大きな調査結果が得られたわけではないが、密航者が小さな海辺の町に上陸して、間もなく逮捕され、数日後にはサンフランシスコにつれて行かれてしまったという「小さな」事件の割には、多くの資料が残されていたともいえそうだ。日本とアメリカとの行政組織のあり方の違いなどもあって、日本では可能な調査が行き詰まることもあった。未完の調査ではあるが、これまでの調査の状況と、現段階までに得られた知見を記録に残しておきたい。

1. 事件の概況

サンフランシスコから国道101号を北に約80マイル、州道128号を北西に70マイルあまり、九十九折りの山道が太平洋に達した地点から、20マイルばかり南下したところに、ポイント・アレナという小さな町がある（岬はダウンタウンから5マイルほど離れたところにある。岬の名前は「アレナ岬」町の名前「ポイント・アレナ」と記載する）。海岸線は切り立った崖の連続で、所々に小さな入り江を抱えるように巨岩が海につきだしていた。打瀬船の上陸地はかくもありません、と思われた。沖の方でも暗礁がところどころ波に洗われて、細波をたてていた。入り江



写真B アレナ周辺の海岸

渡辺氏撮影

の入り口に大小の岩だらけの小島があるのも、劇的な配置のように思われた。「上陸するにはこんな岩場は避けるだろう」、「いやいや、もうそんなことを言っている余裕はないのではないか」と北針研究会の人々も興奮気味であった。エルクという小さな町を経由してアレナ岬に至るあたりは、最近、避暑リゾートとして開発が進みつつあるという。B & Bの洒落た民宿も増えている。

歴史的に見れば、ポイント・アレナに小さな集落ができ始めたのは1860年代の初頭で、1866年には最初の埠頭が、1869年には製材所がつくられている。ついで、製紙工場、酪農場ができ、捕鯨業の基地にもなり、沖合いで捕らえられる鯨から、当時ランプ用に好んで用いられた鯨油も生産されるようになった。ダウントウンは、今は人影もまばらな眠ったような町であるが、ヴィクトリアン風の装飾をほどこした建物なども見え、かつてのにぎわいを思わせる雰囲気は残っている。1906年の大地震で壊滅的な被害を

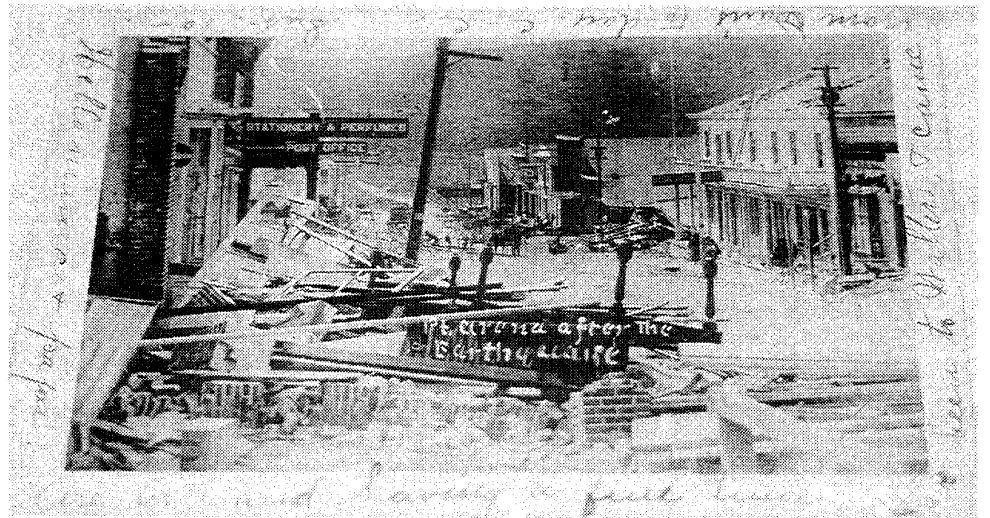
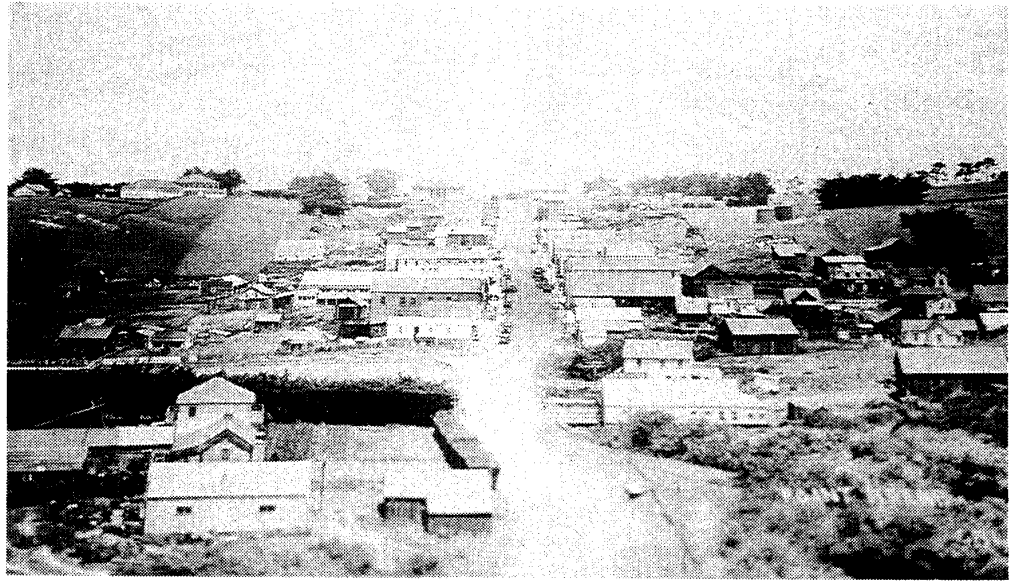
受け、町は二度と元の活況を取り戻すことはなかったという。真網代からの打瀬船が流れ着いたのは、その数年後、1913年のことであった。現市長のRaven Earlygrow氏によると、現在の人口は約450名、家族数約200世帯で、「恐らくは西海岸で一番小さい市」であるという。市になったのは1920年代であった。カリフォルニアで、全米に先駆けて禁酒法が敷かれることに

なった時、当時製材所で働く人が多く、酒場や遊廓で賑わっていたこの町では、市になれば禁酒法反対の決議ができるということで、市制を敷いたのだという。1940年代まではますます人も多かったが、最近はさびれるばかりである。現在の町の産業は、第一に観光、第二に鮭や鮑などの漁業で、最近は養殖業も盛んになっており、ウニを東京に送り出している。林業も未だ少し残っている。アメリカ軍の小さなレーダー基地の撤退が目下頭の痛い問題であるらしい。⁴⁾

岬は、そのダウントウンから北西約5マイルのところであり、北米大陸で最もハワイに近いところ、また西海岸で最も霧の深いところとも言われている。灯台を兼ねた博物館があり、1870年には既に連邦政府管轄の灯台として機能していた。この灯台から密航船の当時怪しい光を見たという連絡がサンフランシスコの移民局になされている。打瀬船の乗員たちもこの明かりを目にしたはずである。

19世紀末に始まり、1905年頃から本格化した

日本人移民の排斥運動に対抗して、日本中から多くの人々が密入国を図った。船員になって寄港地で逃走する、あるいはカナダ、メキシコ国境から陸路入国した者が多かったが、その中で最も勇猛果敢な試みの一つがこの地方からの打瀬船による密航であった。外交資料館に残る在桑港帝国総領事館の報告書から、この事件の経緯を見ておこう。船は、伊方村豊野浦で1000円で購入した80石積の和船、琴平丸で、米20俵、干し魚その他の副食物、飲料水を積み込み、上野留三郎を船長に「簡略ナル地図及び磁針ヲ準備」して、大正3年の旧暦の4月14日（新暦5月20日）頃、夜半密かに真網代を出帆した。船には総勢15名が乗船していた。上野留三郎、菊松兄弟、石田平助、山内岩助の4名は、明治33年頃に渡米し、ワシントン州などで鉄道工夫として、更にカリフォルニア州ワッツソンビル周辺の農場で働いていたが、40年頃に相次いで帰国していた。日本における生活が苦しかったため、再渡米を希望したが、移民渡航制限のため旅券がおりず、やむなく漁船による密航を試み



写真C：上 1912年当時のポイント・アレナ全景
下 1906年サンフランシスコ地震直後の町

(メンドシーノ歴史協会所蔵の絵葉書より) 渡辺氏撮影

たのだと供述している。伊豆大島に達するまでに28日を費やし、これより東北に向かって潮流と帆だけを頼りに航海を続けた。途中、天候不良に出会うこと3回、大波で船が覆没しそうになったことも何度もあったが、互いに協力しつつ、伊豆大島を出て55日目にアレナ岬付近に上陸した。上陸日の午前中に霧の中で出会った汽船に通報されたものらしく、8月9日、10日の両日にかけて、15名全員が捕らえられ、再び琴平丸に収容されて、小汽船に曳航され、14日に

たのだと供述している。伊豆大島に達するまでに28日を費やし、これより東北に向かって潮流と帆だけを頼りに航海を続けた。途中、天候不良に出会うこと3回、大波で船が覆没しそうになったことも何度もあったが、互いに協力しつつ、伊豆大島を出て55日目にアレナ岬付近に上陸した。上陸日の午前中に霧の中で出会った汽船に通報されたものらしく、8月9日、10日の両日にかけて、15名全員が捕らえられ、再び琴平丸に収容されて、小汽船に曳航され、14日に

サンフランシスコの移民局に引き渡され、尋問を受けた後、日本に送還された。

ほぼ同じ頃、八幡浜市向灘からも別の船が出航した。先の船の乗組員も、当初はこの船に同乗することを希望していたが、謝礼などの折り合いがつかず、別船を仕立てている。前者を上野組、後者を魚崎組（船長は魚崎亀太郎）と呼ぶこととする。魚崎組の方が数日早くアレナ岬の北100マイルのユーレカで逮捕されている。

2. 調査の方法と進行状況

資料収集を主目的とする調査は、目下のところ、(1) 現地における予備調査（1995年5月28日～6月5日）、(2) 電話による資料の所在確認、(3) 現地における本調査（8月3日～12日）の概ね3回行った。

(1) 予備調査

シアトル、サンフランシスコの愛媛県人会関係者への取材協力の依頼に始まり、サンフランシスコ、ポイントアレナ周辺での資料収集を行った。

内容については後述するが、サンフランシスコでは、海事博物館やかつて移民局の置かれていたエンジェル島などを訪ねた。エンジェル島はサンフランシスコの沖合いにあり、上野組、魚崎組の人々も捕らえられた後、この移民局に拘留され、取り調べを受けている。また、ポイントアレナ周辺では、市庁舎を訪ねたが、生憎何の手がかりも得られなかった。わずかに『メンドシーノ・ビーコン』などの近隣の地方紙のバックイシューから、上野組の漂着に関する記事を発見（Kelly House,

Mendocino) したのみであった。

(2) 電話による調査

予備調査は期間も短く、大きな手がかりも得られなかったので、2度目の現地調査を効果的に行う為、日本からの電話で、思いつくりの可能性をたずねて、資料の所在の確認と調査協力の依頼を行った。突然の、紹介者もない電話であったにも関わらず、全ての人が快く協力を申し出、手元に資料が見つからなかった場合も他の可能性のある場所を紹介して下さり手がかりが広がった。

(3) 現地調査

(2)の事前調査をもとに、今回も短い期間であったが効果的に調査を行うことができた。主たる調査場所は次の通りである。

サンフランシスコ

1. 国立公文書館シエラネバダ分館
2. 市立図書館で『サンフランシスコ・クロニクル』『サンフランシスコ・エグザミナー』などを閲覧。

ポイントアレナ

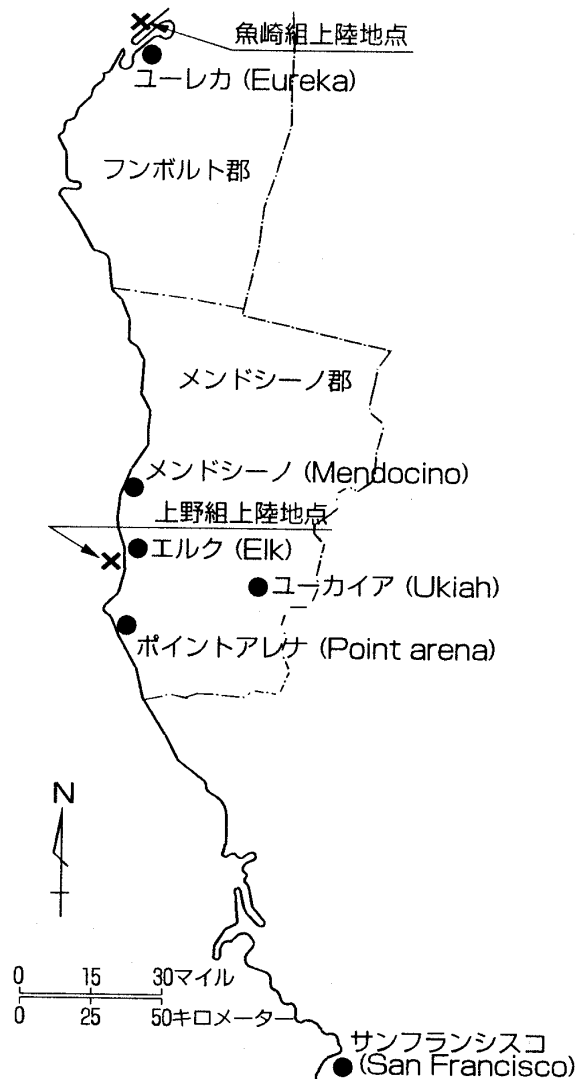
1. ポイントアレナ市長に面接
2. アレナ岬灯台…博物館を兼ねているが当時の資料はなし
3. 地方史家ジョン・ビアージ氏に面接
4. 地方史家エミリー・エスコラ氏に面接

ユーカイア

1. メンドシーノ郡立図書館で地方紙数紙の記事検索
2. メンドシーノ歴史協会所蔵のポイントアレナの古絵葉書閲覧
3. ポイントアレナの元市長ジョン・スカイメラー氏に面接

ユーレカ (魚崎組の上陸地)

1. 国家海上保安隊…上陸後の密入国者については、管轄外のため、拘留して移民局に連絡するだけで、尋問などはできない。打瀬船についての資料は望み薄とのこと。
2. クラーク博物館…魚崎組の船と乗組員の写真を保管
3. フンボルト郡立図書館で地方紙数紙を検索
4. フンボルト郡歴史協会で打瀬船の写真を保管



図A 調査地の位置関係 (北カリフォルニア)

3. 調査による知見

上陸地の特定作業

北針研究会の人々の目的は、上陸地の確定にあった。この作業は予想以上に難航した。頼りは住人の目撃情報と、当時の地方紙の記事、乗組員の妻に直接インタビューしたことがある大野氏のノンフィクション小説の記述であった。当初、いろいろな資料にあらわれる「アレナ岬」という地名にこだわりすぎた。「アレナ岬」から5マイル、15マイルと資料によって違いがあった。「アレナ岬」が灯台の位置を示すのか、町の市庁舎の位置か、それとも市境か、明らかでなかった。役場で出会った人物が、自分は子供の頃祖母のこの話しを聞いたことがある、と地図上でその位置も場所も示してくれた。いかにも絵になりそうな場所であったが、足だけで上るには少々高さがありすぎた。

その他の目撃情報に関しては、実際に打瀬船やその乗組員を見たという人物に出会えなくても、話しに聞いたことがあるというような人がいる可能性はないか。一般のアメリカ社会に見られるモビリティの高さがこの辺りには当てはまらず、何世代にもわたって居住している家族が多いと聞いた。80年という歳月は目撃情報の可能性を残しているように思われたが空しかった。

次に新聞記事であるが、まず『ユークア・タイムズ (The Ukiah Times)』の7月29日付けの記事には「アレナ岬の沖合い5マイル、北10マイルの地点で、日本のジャンクが発見されたとの報告の後、W. ケッチャム氏が町の近くの森の中で15名を逮捕した」としている。逮

捕までの模様は、8月15日付け『デスパッチ・デモクラット (Dispatch Democrat)』に詳しい。14日のアレナ岬からの配信によると、13日の朝、怪しい日本人が8名、アレナ岬を南に歩いていたところを G.ミラーが発見、4名を直ちに逮捕し、残る4名は後ほど、ギブソンとケッチャム氏が海岸で拘束した。更に10名が同日町の北で発見され、うち7名が捕らえられたが、10名の内3名が移民手続きの書類をもっていた。「彼らのほとんどは、アレナ岬とグリーンウッドの間のどこかの地点で、数日間潜伏していた平底船から上陸したと考えられる」、「船はグリーンウッドに係留されており、すべての帆は準備され、かなりの荷物や食糧が積み込まれていたままになっていたが、無人であった」と記している。8月16日付け『メンドシノ・ビーコン (Mendocino Beacon)』は、「エルクの近くの A.ディリングが自宅近くの海岸で船をみつけた」、そして最後に『ポイントアレナ・レコード (Point arena Record)』(8月15日)に「エルク・クリーク (Elk Creek) 上陸後、数人が逃亡したと考えられている」「船はグリーンウッドの近くに上陸し、そこで流されて、John Julius ら数名がガソリン・ランチで2本マストのこの船をポイントアレナの港に曳航してきた」とある。

地元紙数紙の内容を総合すると、上陸地はアレナ岬の北約15マイルのエルク辺りに考えるのが妥当であろう。

「ノンフィクション」と銘打った作品の内容をどの程度「歴史」の資料として用いることが可能かについては以前から多いに関心のあるところであった。『北針』の記述の中から、上陸

から逮捕までの彼らの移動の状況の特定に結びつきそうなものを選んでみる。時間や方位に関する情報の連続性が曖昧だが、情報量はかなり多い。

まず上陸地点の形状が次のように記されている。

「丁度歩いて海を渡れる浅瀬まで侵入していた」「三メートル四方ほどの岩場に十五名が集まった」「岩場から崖上まで、五、六メートルの高さがあった。程良く中央に岩の切れ込みがあり、そこを登ればよかった。だが、四日間も吹き荒れた暴風雨の影響か、崖上から水が切れ込みを伝って滝のように流れ落ちていた」「素足で岩を登り始めた。……四歩ほど登ると、四つん這いの格好で滑り落ちた」

「藁草履をはいて、崖に挑んだ。そして身軽に岩肌を登っていった」「藁草履んはいたら楽ながやねえか」

「その地点から内陸を眺めると、緑の牧場と黄金色に色づいた麦畑が、涯しく拡がってみえた」

ここから一行は、人の目にたつことを恐れて小グループに分かれたり、また一緒になったりしながら、それぞれの目的地を目指す。

「牧場を斜めに突っ切って、道に出た」「道についた轍に沿って丘陵に出た。丘陵からゆるやかな下り坂になり、浅い盆地を抜けたところに緑の木立が見える。道はどこまでも一直線である」「(丘に上がると) 右手の木立の中に人家があった」

この家は農場で働くインディアンのもので、ここで彼らは食糧と水を得ている。

この記述を地方史家ジョン・ビージ氏に話して、上陸地点を推定してもらったり作物の植え付けの状況を地図に描き込んでもらったりした。昔とはかなり地形や土地利用の状況が変わっているが、水利の関係などを考えながら慎重に記してくれた。この時点での上陸地の特定はやはりできなかった。

これらの記述を歴史的な資料として用いるには、2つの留保条件がある。まず最初に、語られた情報の正確さが問題となる。更に語ったのが本人ではなく家族であること、これが作家に語られるまでに、長い年月を経ていることも考慮に入れざるを得ない。第2に、作家の主観がどの程度入れられているか、という点が問題になる。想像力は、伝達された内容以上に真実に近づける可能性があることも否定できないが、一方で「あらまほしき」イメージを作りだしてしまう危険性も否定できない。「文学」を「歴史」の資料として用いることの難しさを感じた。(但し、このことが文学としての価値まで減じるものでないことは勿論であるが。)

ポイントアレナに入ってから逮捕までの状況は『ポイントアレナ・レコード』に詳しい、8月15日付けの「日本の侵略」と題する記事を追ってみる。サンフランシスコから日本人の上陸の可能性を通告されていた警察副署長のガス・ミラー氏は既に8人を逮捕し、留置所に留置していた。その後、リバーサイド・アヴィニューのマイヤーの所有地で大勢の日本人を目撃したという情報が入った。この辺り一帯を調査したが、目撃者が麦畑の切り株を見間違えたのであろうということで町に戻った。実は日本人はそこにいたが、既に道はずれて、近くの山峡や野生

の豆の中に姿を隠し、夜を待っていた。7時頃7人が再びリバーサイド・アヴィニューを岡の方に向かって姿を現した。ヒギンズ家の所有地でカーランド、レイシー、ジャンセンの3人によって取り押さえられ、警官が呼ばれた。その間、スペンサー家の方に歩いていたが、近づく車の警笛が鳴らされた時、一人が草むらに逃げた。カーランドが追跡し、鞭こそ当たらなかったが、連れ戻し、二度とこのようなことをしないように言った。車には警察のケッチャム署長、ツズインマーマン執行官代理、ディクソン連邦裁判所執行官が乗っており、カーランドが運転していた。3人の日本人がディクソンの監視下、車に乗せられ、ケッチャムとツズインマーマンが徒歩で残る4名を町に連行した。途中、リーダーが「自分はサンタローザに行くところだ」と訛りの強い英語で語った。彼らはその直前中国人チャーリー・ドクの店に立ち寄っており、そこで、職を得るために来た、と語っていたという。

これだけ地名や土地の所有者の名前が分かれば、日本ならば、簡単に地図上で道順を指さすことさえ出来そうだが、たった1人の市職員に尋ねても、住宅地図もなければ、土地台帳もない、とにべもない返事が返るばかりであった。80年前くらいなら、土地の古老の語りから得られる情報も多いものだが、今回はそれもできなかった。ビージ氏に追調査を頼んで帰国した。

上陸地の反応

1908年施行の日米紳士協約によって一旦日本からの移民の数は減少したが、排日の嵐は収まらず、協約の家族条項を用いて入国する花嫁たちや、これらの密入国者の存在が、世論の注目

を浴びつつあるころだった。真網代からの打瀬船が漂着した1913年は、カリフォルニア州で外国人土地法が通過した年でもあった。当然在米日本人は密入国者に対するアメリカの世論に慎重になっていたはずであった。ここで、上陸地の反対を、アメリカ社会と日系社会の両側から見ておこう。まず地元の反応であるが、当時、まさにふってわいたようなこの事件は、この海辺の小さな町の周辺にどのような波紋を巻き起こしたのであろうか。

どの記事も、この小さな木造船が太平洋をわたったという事実を信じられない様子であった。カナダのブリティッシュ・コロンビアあたりまで大きな船で来て、そこから小舟に分かれたのであろう、というものもあれば、日本から大船団が続々押し寄せてきており、霧の向こうにはその大船団が控えている、というヒステリックなものもある。日本からの密航者の存在にかなり神経質になっている時代だけに、当然といえば当然な反応である。

1913年8月16日の『メンドシーノ・ビーコン』に少しだけ同情的とも思える記述があった。

(この企ては) 不運であったと言わざるを得ない。というのは、このような、少々人里離れた町では、日本人を見ることなどまずなく、小さなグループであっても人の口へのぼり、ついには当局に連絡され、結果的に逮捕されてしまうということになったからである。

日系社会の反応

次に当時の日系社会の反応を、現地の邦字新聞『新世界』『日米』⁵⁾の記事から追ってみよう。

まず、8月11日、8日に8名の乗組員がアレナ岬で逮捕されたことを報じている。前日、まず汽船ヘンリー・スコット号、次いで灯台の看守が、同船が海岸から5マイル内外の距離を彷徨していることを報告していたので、移民官のバックス氏が、予め2台の車を派遣して警戒をしていた。派遣されたフランク・アインスウオースが船体の検査を行ったが、船の構造及び付属品から見て近海から航行したものではなく、日本から直接の密入国航行であることが明らかである。この同じ船が、西海岸の3箇所に見られたものと考えられる、と報じている。翌12日の記事は、残る8(ママ)名がアレナ岬の北約3マイルの海岸で空腹のため身震いしているところを逮捕され、11日に15名がエンジェル島に護送されたことを伝える。13日に23名の逃走者を引き続き捜索中、とされているのは魚崎組か。

14日の記事では、記者が移民局に面会にいった模様で、いささか興奮気味にこの「壮拳」を讚えている。

極めて小さき漁船にて太平洋を横断したる是等日本人については移民局官吏も其大胆なるに舌を巻きコロバス以上の壮拳なりとて法律違反(ママ)とは言ふものの大に優待し居る由なるか……

この密航者たちが、ただ貧しく、無知蒙昧の輩ではなく、密航に至った事情に理解を示し、準備を十分に整えてきたことを評価する文面も見られる。

……是等密航者の容貌風采を見るに決して無教育なる漁夫或は百姓とも見へず何れも立派なるのみならず携帯品中には在米知人との往復書類村役場其他へ出願せる書類或は

又日記様のものに見るも何れも渡米志願をなして許可せられず止むを得ず此の大胆なる行動をなしたるを察し得られたり

……出発する前の状態は其書類によって見るに相当なる金をも費消し種々運度したる形跡ありて伊豫八幡浜町の三日月楼と言へる料理店に会合し大に此壮拳の前祝にてもなしたる如く勘定書ありて此外にも各料理屋宿泊等の請取なぞも荷物中にあり……

1日遅れて8月15日、『日米』も次のように報じている。

国禁を犯して密入国を企つる。其の非彼等にあること明白にして単に法理上より冷眼視せば何等同情すべき点なきは勿論なるが一度び彼等が敢行したる命がけの大胆なる行為に想到して面かも此の冒険者が吾等と郷を共にする日東海国の快男児なる点に於て吾人は其罪を憎んで其人を憎まず薄々同情に堪へざるものあり

紳士協約以来の日本からの移民制限と、自分たちの足下をさらいかねない排日の動きのなかでの密入国者であるから、彼らの反応も慎重にならざるを得なかったが同情の念は直載に語られている。これについては、次のような『日米』の記事が見られる。

一行中の物知りで而も四五年までは米国に居たと云う植(ママ)野留三郎(四四)は記者に向って斯ふ云って居る

「一行中には四名の再渡航者も居りますが旅券が仲々下りません日本のお上は非常に嚴重であります再渡航の私共でさへ斯うでありますから普通の人では到底旅券を得ることは出来ません」

正直なる彼の言葉に嘘、偽はない日本政府が米国への口約を重んじ如何にゼントルマンズ・アグリーメントを厳守して居るかは之を以ても明らかなる事実である旅券が貰へない彼等の為には真に気の毒であるが稍をもすれば日本政府が米国との口約を無視して寛大なる取扱いの下に労働者をドシドシ渡米せしめつつありと云ふ排亜協会などの侮言に対する反証として格好の材料ではあるまいか(8/16)

8月14日付け『日米』は義捐金の募集を開始する。

其罪は悪むも奇跡的彼等の大胆なる行為は大に賞賛に値するものあり殊に之れ等の成り行きを知らず故郷に消息を待ち居る家族は誠に同情に堪へざるものありとて同県人三木、隆辻、田邊其他の人々發起人となり家族の為め同胞有志の義捐を仰ぎ故国に送金し遣るべき計画なれば……

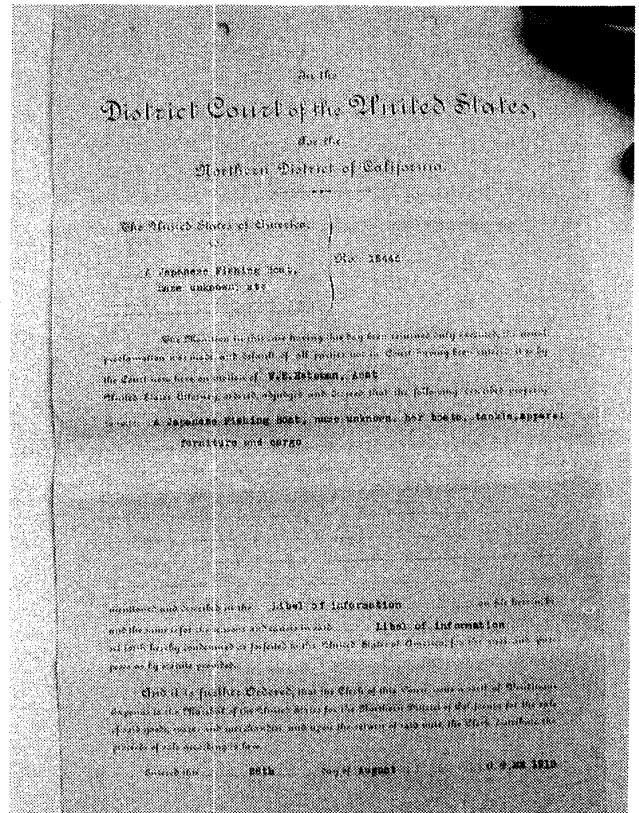
義捐金は9月8日の段階で、『日米新聞』に339ドル50セント、愛媛県人会に341ドル余り寄せられたが(9/9)、魚崎組の8名、上野組の14名は、4日突然に、病気の3名を残してチャイナ丸で日本に送還されていたため、町村役場に送付することとした。

8月15日付け『日米』には、2つの記事が見られる。1つは、中央政府からサンフランシスコ税関に船体をサンフランシスコに回航した上で競売に付すよう命令があったことを報じている。尚、これらの密航者は、検疫規則違反、人頭税を払わなかった外国人の密入国、移民規則に従わなかった外国人の入国という3条の国法に抵触するものとされている。罰金を通計する

と2万ドルに上るが、船体を競売しても1千ドル以上にはならないだろう、としている。同じ頁にアレナ岬に上陸した15名が逮捕され、同地の収容所に収監され、監禁部が狭く、収容者が45名と多いので「恰も缶詰の如く押し重なりて前後5日を暮らした」ことを報じている。この二万ドルの支払いについては明らかになっていない。義損金は予定通り、直接日本へ送金されている。西海岸に上陸したことが確認されている3船に関しては、第2回と第3回がそれぞれ船体が捕獲されているので、この漁船による密入国は、前後3回に及ぶらしい、とされている。

打瀬船の行方

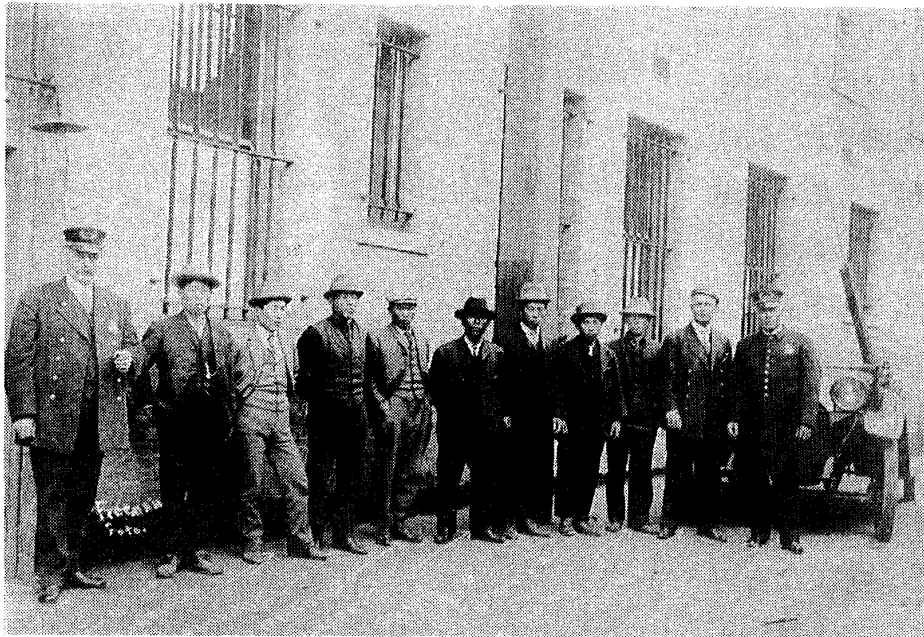
アメリカに上陸した打瀬船は、最終的にはどのような末路をたどったのであろうか。10数年前の愛媛県の調査の折に、サンフランシスコの海事博物館にかつて打瀬船が展示されていたという話を聞いていた。大野氏の本にも同じ記述がある。堀江健一氏のヨットが展示される前に、その場所に置かれていた、という具体的な話であったので、船体の一片、少なくとも何らかの資料が残っているのではないかと考え、確かめに行った。同博物館から同じ敷地内のJ. ポーター・ショー・ライブラリーにもまわったが、海事博物館に打瀬船を展示した事実はない、とのことであった。西海岸の難破船の記録などあたってもらったが、ついに資料は見つからなかった。もう一つ、戦前、打瀬船が金門公園の入り口に置かれていたという噂もあり、これも管理事務所に調べに行った。結果は、展示されていたのはアムンゼンの船で、老朽化が進んだので母国に送り返し



競売の命令書
国立公文書館所蔵 筆者撮影

た、とのことであった。サンフランシスコ近辺の愛媛県人にはかなり知られた話のようであり、正直なところ狐につままれたような思いである。

ハンボルト郡ユーレカについての魚崎らの船、東光丸の行方を示す資料が国立公文書館シエラ・ネバダ分館に残されていた。⁵⁾連邦裁判所北カリフォルニア地区法廷の、この船の競売の命令書がこれである。船はこの時点でユーレカ港の北12マイルの浜辺に打ち上げられており、1913年9月10日、午前10時に郡裁判所の入り口で競売に伏されること、この競売に関しては地元新聞『フンボルト・タイムズ』に9月2日から9日まで連日掲載される旨、記載されている。この船に関しては、上陸地の女流写真家が撮影して絵はがきにしていた。外交資料館に残され



ユーレカ刑務所前の魚崎組の人々
(クラーク博物館所蔵) 渡辺氏接写

ていたこの写真のオリジナルがユーレカのクラーク博物館 (Clarke Museum) 残されていた。

上野組の琴平丸に関しては、「ポモ」号でエンジェル島に曳航されるが、その後魚崎の船と同様、移民局に押収され185ドルで公売に付された。

好奇心にも其小舟を買取りたるは當市のオーガスタス・モルガン氏にて上等裁判所判事モルガン氏の兄弟なるが同氏は本週始め数名の友人を其小舟に招待し自ら舵を取て湾内を廻航したるに其の乗心地大に好く大成功なりし由にてモルガン氏は得意の鼻をうごめかし居る由なり (『日米』9.19)

密入国を計った船を判事の兄弟が買いとって自慢げに乗りまわしている。少々ホッとさせられる図ではある。

都合2ヵ所の打瀬船の上陸地付近を自分の目で見ることができた。ユーレカのソノマ海岸は、どこまでも続く砂浜に荒い波が押し寄せる様が圧巻であった。アレナ岬周辺では、陸からはも

ちろん、海上からも上陸地点を探すことにした。この周辺は霧も深く、また海流の関係で航行が難しく、「船の墓場」とも渾名される場所である。8月11日、地元の海難救助艇を頼んでエルクまで往復2時間の予定でアレナ港を出航した。風が強く、霧も深く、途中突然その霧の晴れ間に黒い崖が現れた時には、打瀬船の旅の最終の日の感激を共有したような心持ちがしたもの

だった。その後、その船が燃料切れで海上で立ち往生し、数時間後、他の救助艇に文字どおり「救助」されることとなった。岩礁の多いところだという。地元の最新鋭の船に乗っていてさえ不安であった。期せずして、打瀬船の航海が文字どおり命がけの航海であったことを思い知らされる経験となった。

まとめにかえて

脱稿前日の1996年3月10日、八幡浜市真網代の「アメリカおこもり」に参加した。アメリカにいる親類縁者の無事を祈って、地区の神社でお祓いをしてもらい、お札をアメリカに送るもので、初期の記録は残っていないが、大正2年が始まりのようだと、参加者の一人が語っていた。当日は参加者19名で、お祓いを受けるアメリカ側の人々の数も30名程度、既に疎速になって生死の明らかでない人もいるようだ。「二世

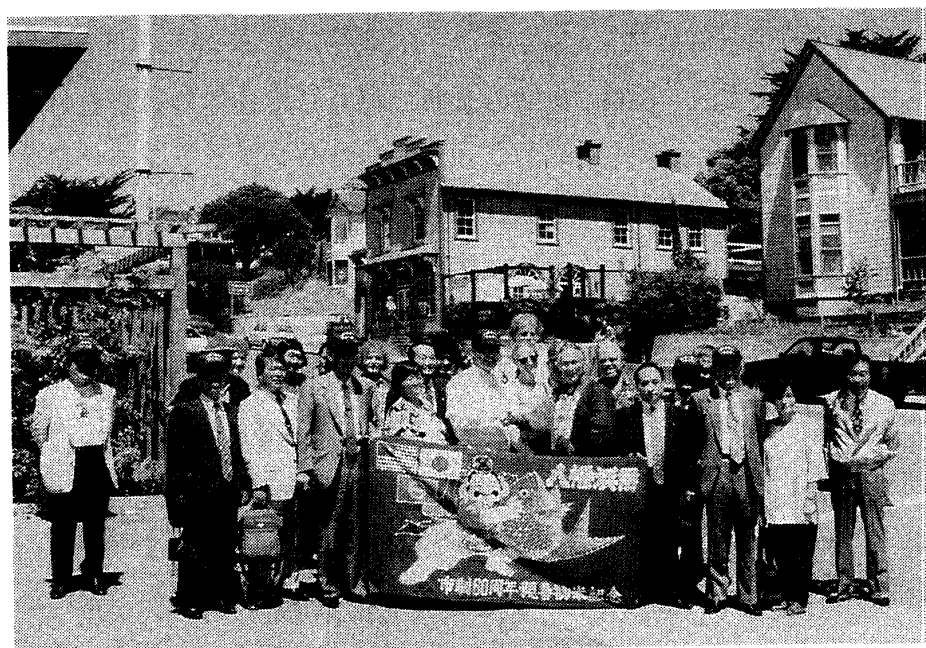
まではええが、三世になったらいけない。(もうだめですねえ)」と世話役たちが話している。三世の代になると、故郷への帰属意識も薄れてしまう、という意味のようである。「昔はお祭りよりもにぎやかやった。」

「学校の帰りに寄るように言われて、ここ(縁

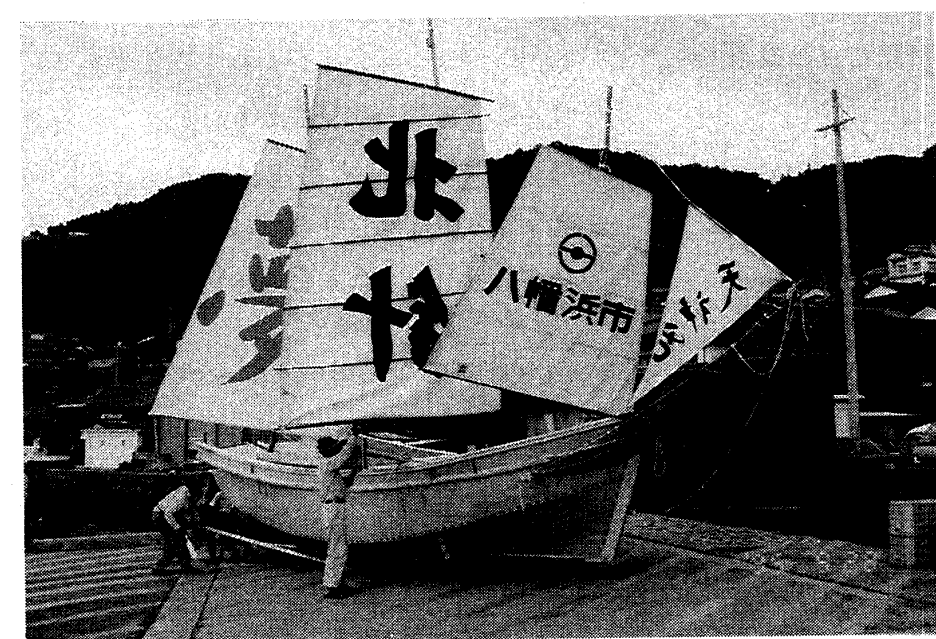
側)で食べたの覚えとるもん。」

「白い米がごちそうやったもんなあ、あの頃は。」

太夫が就任した昭和32年頃は皆が重箱持参であった。部屋も隅々までいっぱいだった、と一頻り昔の盛況ぶりが語られる。



八幡浜-ポイントアレナ交歓会(1995年8月6日)



打瀬船の模型

昨夏には、八幡浜市の市長の一行がアレナ岬を訪ねて交流を深めた。昨秋、北針研究会では、実物の半分くらいの長さの打瀬船の模型を造り上げた。今年6月にはアレナ岬に記念碑を建てるべく、準備は順調に進んでいるという。除幕式はこのようにやろう。土産に法被をつくろう。記念碑ができれば、次に実物の打瀬船を造って、実際にアメリカへの航海をしよう。地元との交流も考えなければならぬ、とアイデアが次々に生まれる。恐らくこの人たちは、この夢を一つ一つ楽しげに実現していくであろう。八幡浜とアレナ岬、海に抱かれた2つの町が、打瀬船によって結ばれた。この小さな町に、再び「アメリカの風」吹いてきているようである。

- (1) 渡辺真氏 (テレビ愛媛) の調査では打瀬船による密航は少なくとも16回企てられ、その内少なくとも6回が北米大陸に到達しているという。(1996年3月16日)
- (2) 北針研究会 (代表: 松浦有毅) 設立趣意書 (平成5年5月)
- (3) 予備調査には北針研究会から松浦有毅代表、上野富顧問、大下長久、松野寿、二宮直之、矢野哲各氏、八幡浜市からは岡寅雄商工観光課課長、作家の大野芳氏、テレビ愛媛から渡辺誠氏、福尾英明氏が参加した。

2度目の調査は大野氏、渡辺氏と筆者の3人で集中的な資料収集を行う。短期間にもかかわらず、広い地域にわたる調査が行えたのは、ひとえにこれらの人々のお陰である。また、本文中で紹介した方々以外にも、地元の大勢の方々のご協力をいただいた。謝意を表しておきたい。
- (4) 1995年8月6日、アレナ岬町の市長の執務室前の路上でインタビュー。
- (5) 『新世界』の記事の収集に関しては、サンフランシスコの Japanese American Historical Archives の岡省三氏の手を煩わせた。「同胞八名捕はる ポイントアレナにて」(8.11.8:4)、「就縛密入国者十五名 昨朝天使島に護送」(8.12.8:4)、「密入国者訊問」(8.13.8:4)、「移民局の珍客 九名の大胆なる密航者」(8.14.8:4-5)、「密入船の処分 三種の国法に違反す」(8.15.8:3)、「海上五十五日 密入国者苦心の実状」(8.15.8:4-5)
- (6) 本文の文頭で紹介した日本の外務省外交史料館に残っていたサンフランシスコ移民局の取り調べ調書は、この公文書館には残されていなかった。アーキビストの Neil L. Thomson 氏によると、INS (Immigration and Naturalization) の資料は、全部で36,000フィートあったが、この公文書館にあるのはわずかに16フィートである。1940年の火災で焼失したものもある。処分されたもの、ワシントンD.C.の本館に送られたもの、どこかに紛れ込んだものもあるだろう。また、彼らの取り調べにあった Fuggason 氏は、移民希望者から賄賂をとっていたと、後に告白している。当時はしばしば行われたことであり、その関係で書類の改竄なども行われているようだ。打瀬船に関するこれ以上のINS資料を見つけるのは難しいのではないか、ということであった(8月4日面接)。